

人間に話をさせるのではなくて、動物に話をさせよう

東京大学農学部 小野寺 節

小澤氏の論説に対する品川氏らの反論の中に、衆議院農林水産委員会会議録に基づく記載があります。品川氏らによれば、この委員会は平成17年7月22日開催ということでしたが、同日にそのような会議は開催されていませんので、おそらく7月27日開催の委員会であろうと思われます。ここで、民主党山田議員の下記のような発言があります。

「アメリカでは、いわゆる21カ月齢、23カ月齢の検査結果について、昨年もことしも、アメリカの農務省のペン次官、担当官も、それはおかしいんじゃないか、我々は、その確認というか、それはBSEの感染だとは思っていないというような言い方をされたわけですが、先般、聞いたところによると、民主党の鮫島議員もアメリカに行って、そこに日本のプリオンの専門委員の先生もおられたように聞いていますが、やはりグレーゾーンであるというような言い方をその専門の先生までおっしゃったようです。」

議事録によれば、この発言に対して品川氏は「プリオンあるいはプリオン病の本当に研究をされている専門家という意味での専門家です、そこの方々との話の中で、このものがグレーだとか怪しいとかという話は一切ありません」と答え、この専門委員を「にわかプリオン学者」の一人とも呼んでいます。この専門委員とは私のことであろうかと推察し、一言述べさせていただきます。

まず、品川氏の批判は議員の発言、すなわち伝聞に基

づくものであり、その事実を確認する努力も行っていません。私が知る事実経過は下記のとおりです。

2005年7月20日、米国NIHにおけるホワイトハウス、プリオン病委員会のEugene Major博士との議論の中で、日本の21ヵ月、23ヵ月のBSEについての議論があったことは事実です。この席には鮫島議員も私も同席しました。そして、その結論は、「人間に話をさせるのではなくて、動物に話をさせよう」というものでした。つまり、科学者である限り確認の作業が必要であることは誰もが認めるところであり、その意味で、動物実験なしには何も云えないというもので、この問題の明確な答えを得るためにはさらなる科学的なデータが必要であるというものです。この会話の内容は2003年12月4日のOIEによる非定型BSEについての報告の内容を越えるものでもありません。

非定型BSEについては、欧米の学会(Zanusso, G. et al. Keystone Symposium, Utah, February, 2005)等においても議論がなされ、一定の結論が出ています。つまり、過去3年間の動物実験(サル、マウス、トランスジェニックマウス)において、非定型BSE脳材料から病原体の分離はできなかった。つまり非定型BSEは、Dr. Zanussoの言葉を借りれば、別のstrainであるとの事です。最近の科学的知見に基づき、適切な対策を立てられんことを希望します。

日本獣医学会会誌(JVMS)の毎号巻頭に挿入される色刷りの日本語ページは、学術大会の案内(告知板)や書評、トピックなど国内会員へのサービスを目的に編集委員長の責任のもとに掲載しているものです。前号以来誌上で繰り返し広げられている議論もそうしたプロセスを経て掲載されたものであることを付記させていただきます。

編集委員長 森 裕司